発表要旨

古典ギリシャ語の統語論上および構文上の特性について

竹島　俊之

ゲルマン語の最古の文献はウルフィラ(311-383)によって翻訳されたゴート語訳新約聖書である。この言語では定動詞句においてギリシャ語と同じように人称代名詞主格は用いられていない。ところが9世紀後半に古高地ドイツ語に翻訳された新約聖書のTatianでは定動詞句において弱まった人称語尾に代わって人称代名詞の主格がほぼ規則的に使われていることを説明し、このことより定動詞句において人称代名詞主格を使うことは極めてゲルマン語的特徴であることを主張した。

ドイツ語文法では、統語論上の定動詞句内の語順規則に関しては、動詞の位置だけが問題とされる。すなわち、疑問を表す場合には、動詞は句頭である。Gehst du heute ins Kino?<今日映画へ行く？>、主節では動詞は二番目に置かれる。Ja,heute gehe ich ins Kino.<うん、行くよ>、従属節では動詞は最後に置かれる。Ich weiß,daß sie mit dem Freund ins Kino gegangen ist.<知ってるよ、ボーイフレンドと映画に行ってることくらい>

これは、ドイツ語が印欧語の古い統語規則をしっかりと保持している、とみなすことができる、と主張した。すなわち、古典ギリシャ語の定動詞句の中では主語となる人称代名詞主格が用いられない結果、動詞の位置は結合価という観点からみると句頭、句中、句末の三つに限定される。

句頭　δώσω δέ τοι ἀγλαὰ δῶρα. δ 589
　　君に立派な贈り物をあげよう

句中　σοὶ προτέρω δώσω χρύσειον ἄλεισον. γ 50
　　君には真っ先に金の杯を献じよう

句末　τὰς μὲν οἱ δώσω I 131
　　彼女たちを彼に贈ろう

人称代名詞の主格が用いられない結果、行為項の最大値３個をとる動詞の場合でも変異項は３であり、それから生ずるヴァリエーションはわずかに６である。それに対して人称代名詞の主格を用いると、変異項は４となり、それから生ずる定動詞句のヴァリエーションは２４である。このことから、第一行為項が主語として顕在化しないことと、語順の自由さとは表裏一体の関係にあると主張した。

次に構文論上の説明に入り、ドイツ語では、Sie kann fließend Deutsch sprechen.＜彼女は流暢にドイツ語が話せる＞のように、連鎖詞は補語となる不定詞句の前に置かれ、その不定詞句においては動詞を最後に置く語順を非常に固い構文規則としているが、この点でも古典ギリシャ語において明らかにそれを構文論上の基本構文と捉えることができる印欧語の古い構文構造をドイツ語は今もなおしっかりと保持している、と主張した。

βουλοίμην δ' ἂν ἐγώ γε καὶ ἄλγεα πολλὰ μογήσας　γ 232
οἴκαδέ τ' ἐλθέμεναι καὶ νόστιμον ἦμαρ ἰδέσθαι.

たとえ沢山の困難に遭おうとも、家に帰り、帰国の日を見ることを私は望むだろう。

（この研究発表の内容は『吉川守先生御退官記念言語学論集』に「古典ギリシャ語の統語論上及び構文論上の特性について－δοκεῖν＜と思われる＞の用例の分析に基づいて」という論文にまとめて掲載する予定です）